

町史のひとこま

(第三十一回)

須恵の眼科医 ⑥

眼療宿場

「眼療宿場」とは町立歴史民俗資料館による命名で、歴史学・地理学上にならぬような用語があるわけではありません。わが町には有名な眼科医が住んでいたことから、全国から眼病患者が治療を求めて集まりました。

上須恵村・須恵村では、村民が農業を営むかたわら、これらの人々に宿泊の便を与えたのであり、後には職業化して屋号をもつようにもなり、近世筑前の歴史の中でも特異な位置を占める存在であったと言えます。こうした独特の歴史・経済・習俗があればこそ、「眼療宿場」と呼んでいるのです。

粕屋郡では、上須恵村に田原氏、須恵村に岡氏、内橋村(現在粕屋町)に中村氏と、合わせ

て三人の眼科医がいましたが、規模の違いはあれ、いずれも周囲の農家は宿屋を営み、現在でもまたがいに屋号で呼び合っています。まず須恵村の宿屋について見ておきます。

薬師堂の棟札

旧・岡眼科の門前にあった薬師堂は安政四年(一八五七)に再建されたもので、その棟札に「発起、山内二齋種誠、裏粕屋郡唐原村保生(庄屋)田代和三」と、二人の発起人の名をあげたのち「世話人、吉松小平・吉松茂内・吉松兵次郎・世利喜七郎・今泉善次郎・石田勝右エ門・眼病人宿屋中」と記されています。

このことから、須恵区にも眼療宿場が形成されていたことが明らかにされます。

若殿様

上須恵村については、史料は比較的豊富ですが、中でも「若殿様上須恵村御成達記録」は藩との交渉が記されていて重要です。

これは文政十三年(一八三〇)に、黒田家の若殿様(のちの十一代藩主長薄)が国中を巡回し上須恵村を訪問した際の記録で「眼病人宿手心得方」を上須恵村から藩に提出していることや、若殿が来る前に、上須恵村に入り込んでいる旅人(患者・看病人)の名前・出身地などを詳しく書いて差し出すように、との藩の命令のあったことが知られます。前の棟札と同様、「眼病人宿」という言葉が使われている点が注目される点です。

江戸時代の屋号

天保五年(一八三四)の眼目療治帳から宿の記載を見ると、

五十九軒ありますが、屋号が七例であとは人名となっています。この年の初診者数は九三三人

あって、内一七六人は宿名がなく、宿泊者は七四七人です。これは長くて二百日、だいたい二、三ヶ月に上っていました。(町誌編集委員会 石瀧)

上須恵区に残る屋号の一覧

○印は現存、
△印は屋号は残るが位置不明のもの。

油屋 ○	柴屋 ○	肥後屋 ○
板場 ○	笹屋	肥前屋
老州屋 △	焼酎屋 ○	日田屋
近江屋 ○	酢屋	宝来屋
大阪屋 △	大黒屋 ○	枿屋 ○
枇屋 ○	煙草屋	松屋
鐘崎屋	俵屋	饅頭屋
紙屋	千賀屋	満屋
神市屋	鶴屋 ○	桃屋 △
唐津屋	長崎屋	山口屋 △
川崎屋	長門屋	山本屋 ○
河内屋 ○	博多屋 ○	萬屋
菊屋	橋本屋	若狭屋
車屋	播磨屋	若松屋

50音順・総数42 (田原武雄氏調査)

眼目療治帳による屋号の一覧

①文政3年 (1820)	③天保5年 (1834)	④天保14年 (1843)	⑤弘化2年 (1845)	⑦弘化4年 (1847)	⑨嘉永2年 (1849)
番屋(かみや)	紙屋	かみや	かみや	舛屋	舛屋
	舛屋(ますや)	舛屋	舛屋	かみや	長崎屋
	長崎屋	皿山	日田屋	肥前屋	博多屋
	橋本屋	ひぜん屋	宝来屋	皿山	米
	皿山	若松や	神一屋	橋本屋	日田や
	若松屋	日田屋	舛藤	舛藤	橋本屋
	神市屋	長崎屋	若松屋	宝来屋	橋松屋
	博多屋	橋本屋		米	肥前屋
		神一屋		博多屋	皿山
					かみや
					宝来屋
					角久
					米店
					米屋
					米長